No.4は電子版のみの発行です。

平成30年度
No. 4
11月12日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋１―22―14
電話　03－3501－9288
発行人 会　　長 種村　明頼
編集人 広報部長 戸倉　　務

「ふるさと・挑戦・未来創造」

―ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて 挑戦する子どもを育てる学校経営の推進―

第70回全連小研究協議会北海道大会成功裡に終わる

平成30年10月4日（木）～ 5日（金） 函館アリーナ及び周辺会場

大自然と歴史、ロマンにあふれる北の大地北海道。その玄関口であり、今年開港150周年を迎える函館の地で、第70回全国連合小学校長会研究協議会が10月4日（木）・5日（金）の２日間、全国から約2,500名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、現在の研究主題を掲げた研究大会の６年目となる。１日目は、開会式・全体会の後、13の分科会で「校長の役割と指導性」を明確にするためにフリップやアナライズカード等を利用し、活発な協議が行われた。２日目には「ふるさと・挑戦・未来創造」をテーマとしたシンポジウムが、葛西紀明氏・佐藤麻美氏・青田　基氏の３名をシンポジストに迎え、行われた。閉会式では、全員で「大空と大地の中で」を合唱し、感動のうちに秋田大会へ「志」のバトンが渡された。

大　会　主　題

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて
挑戦する子どもを育てる学校経営の推進～

開　会　式

1　開会のことば　　中村祥一 大会副会長
2　国歌斉唱
3　あいさつ　　種村明頼 大会会長
本間達志 大会実行委員長
4　祝　辞　　文部科学大臣　柴山昌彦様
（代読　文部科学省初等中等教育局教育課程課長　望月　禎様）
北海道知事　高橋はるみ様
（代読　北海道渡島総合振興局長　小田原輝和様）
北海道教育委員会教育長　佐藤嘉大様
（代読　北海道教育庁渡島教育局長　五十嵐　晋様）
函館市長　工藤壽樹様
5　来賓紹介

未来を見据え、必要な教育のイメージを

種村明頼　大会会長

はじめに、大阪府北部地震、西日本豪雨、台風21号、そして、北海道胆振東部地震等の自然災害により多くの被害が発生した。ここに謹んで亡くなられた方々とご遺族に哀悼の意を表すとともに、被災された方々に心よりお見舞い申し上げる。

第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会が、全国各地から多くの会員の参加を得て、この函館市において盛大に開催されることに心よりお礼申し上げる。本日は、ご多用の中、文部科学大臣　柴山昌彦様代理文部科学省初等中等教育局教育課程課長　望月禎様、北海道知事高橋はるみ様代理北海道渡島総合振興局長　小

田原輝和様、北海道教育委員会教育長佐藤嘉大様代理北海道教育庁渡島教育局長　五十嵐晋様、函館市長　工藤壽樹様をはじめ多数のご来賓の皆様にご臨席を賜りましたことに全国連合小学校長会を代表して、心より感謝申し上げる。

2030年を見据え、全ての子どもたちにこれからの時代を生き抜いていくために必要な資質・能力を確実に育成する観点から新学習指導要領が示された。学校教育において、児童一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながらよりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となることができる力を育成していくことが求められている。また、ＡＩ、ビッグデータ、ＩｏＴ等の先端技術が高度化することにより、産業構造や社会構造が大きく変わる Society5.0 に向けた教育の在り方が議論されている。このような中、我々校長は未来を見据え、学校や地域の状況を踏まえ、必要な教育をイメージし創意ある展望と計画のもと、よりよい教育の実現に向け、地域と連携・協働し、教育活動を推進していかなければならない。

全国連合小学校長会は、大会主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、実践的研究を進めてきた。この大会主題は、変化する時代の潮流や近未来的な課題を踏まえ、様々な分野で豊かな創造性やしなやかな知性を発揮し、互いの個性や絆を大切にする社会づくりに貢献できる日本人の育成を目指して設定した。北海道大会では副主題に「ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」を掲げ、取り組んできた。この副主題の設定理由の中には、「変化が激しく将来の予想が難しい時代にあって、子どもたちが高い志や意欲を持って自立した人間として育つためには、北海道の先人たちのように、他者と協働しながら新たな価値に挑み、未来を切り拓いていく力が必要である」という北海道小学校長会の強い思いが込められている。今後の学校経営及び教育活動の方向性や具体的な取組への示唆に富んだ質の高い研究大会になると確信している。

分科会ごとの研究では、それぞれの研究課題において情報交換にとどまることなく、発表内容をもとに、積極的に意見や考えを出し合っていただきたい。新たな小学校教育のグランドデザインの創造と、それを具現化する方策がもてる充実した協議会になることを期待している。

また、明日開催されるシンポジウムにおいては３名のシンポジストの方からお話を頂戴する。自身の学校経営に照らし合わせるとともに近未来的な視点を意識し、能動的な聴講をお願いする。

結びに、本大会の運営を推進してこられた本間達志実行委員長をはじめとする各役員、北海道小学校長会並びに函館市小学校長会、ご尽力いただいた全ての皆様方に感謝を申し上げ、挨拶とする。

ふるさとからの挑戦 そして未来創造へ

本間達志　大会実行委員長

この度の北海道胆振東部地震では土砂災害や家屋の倒壊、断水、大規模停電、尊い命が失われるなど、甚大な被害が生じた。ここに謹んで深く哀悼の意を表すとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げる。また、この震災に対し全国の多くの校長会から励ましの言葉やお見舞いの言葉をいただき、感謝申し上げる。

皆様からの応援とお力添えのおかげで、北海道命名150年の節目の年に、第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会並びに第61回北海道小学校長会教育研究函館大会を、函館市で開催できることは、大きな喜びであり誇りでもある。

変化が激しく将来の予測が難しい時代にあって、子どもたちが高い志や意欲をもつ自立した人間として育つためには、北海道の先人たちのように、他者と協働しながら新たな価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力が必要である。また、人と人との絆をつくり支え合う共生の意識や、夢と希望に満ちた活気あふれるふるさとづくりに積極的に貢献しようとする意識を醸成すること、一人一人の個性と人と人との絆を大切にしながら、自然災害からの復興などに粘り強く取り組むことができるたくましさを育むことも大切である。こうした理由から副主題を「ふるさとの地から世界を見つめ 新しい社会の形成に向けて 挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」とした。

大会１日目の13分科会での研究協議では、参加される校長先生方の意欲が高まり充実した分科会となるよう、グループ討議の在り方やアナライズカード・名札、フリップや実物投影機等を活用した運営の工夫を重ね、参加型、参画型の分科会に視覚化を取り入れ、分科会のさらなる深まりを目指す。大会２日目には、「ふるさと・挑戦・未来創造」をキーワードとして、北海道や函館市に縁のある３名によるシンポジウムを開催する。

本大会の開催にあたり、ご指導、ご助言を賜った文部科学省、北海道、北海道教育委員会、函館市、函館市教育委員会、北海道都市教育委員会連絡協議会、北海道町村教育委員会連合会、北海道ＰＴＡ連合会、函館市ＰＴＡ連合会をはじめ関係諸機関、また全国連合小学校長会役員、事務局および関係者の皆様方に心より厚く感謝を申し上げ、挨拶とする。

文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省初等中等教育局教育課程課長　望月禎様

このたびの北海道胆振東部地震における被災された方々に心からお見舞い申し上げるとともに、一日も早い復興を心からお祈り申し上げる。

近年、社会は大きく変化しており、人工知能の飛躍的な進化等により、社会や職業の在り方そのものも大きく変化する可能性がある中、これからの教育においては、将来の変化を予測することが困難な時代をたくましく、しなやかに生き抜いていく力を育てていくことが重要である。そのため、文部科学省では、昨年３月に幼稚園の教育要領、小・中学校の学習指導要領、本年３月に高等学校の学習指導要領を改訂し、これからの時代に求められる資質・能力を明確にするとともに、「主体的･対話的で深い学び」の視点からの学習過程の改善を通して、子どもたちの理解の質を深めることなどを目指している。2020年度の全面実施に向けて必要な取組を総合的に実施していく。

また、学校における働き方改革については、中央教育審議会における議論を踏まえ、「学校における働き方改革に関する緊急対策」を策定し、本年２月に通知した。学校における働き方を見直し、限られた時間内で教師の専門性を生かしつつ授業や授業準備、研修の時間や児童生徒と向き合うための時間の確保ができるよう取組の徹底をお願いする。

北海道知事祝辞代読（要旨）

北海道渡島総合振興局長　小田原輝和様

第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会の開催を心からお慶び申し上げる。また、ご出席の皆様が、日頃より小学校教育の充実と発展にご尽力されていることに深く敬意を表す。

このたびの北海道胆振東部地震では、子どもたちはもとより学校施設にも様々な影響があった。災害対応や温かいご支援をいただいた全国の皆様にお礼申し上げる。

グローバル化やＩＣＴ化の進行など社会環境が大きく変化する中、子どもたちには状況の変化に柔軟に対応できる能力を身に付けるとともに、望ましい生活習慣の定着や通学における安心安全の確保など教育現場の課題は複雑かつ多様化している。北海道では、こうした潮流に対応し、未来を切り拓いていく資質・能力の育成など「生きる力」の育成を図っている。本大会を通じて全国の小学校長が、人間性豊かな社会の形成に向けて研究討議されることは大変意義深い。本道並びに我が国の教育の発展につながることを期待している。

全国連合小学校長会の益々の発展と参会の皆様のご健勝とご活躍を祈念し、お祝いの言葉とする。

北海道教育委員会教育長祝辞代読（要旨）

北海道教育庁渡島教育局長　五十嵐晋様

このたびの北海道胆振東部地震によりお亡くなりになった方々に心から哀悼の意を表するとともに被災された皆様にお見舞い申し上げる。また、全国の皆様からご支援をいただいたことに心から感謝申し上げる。

教育課題の解決に向け、組織的、継続的に研究を積み重ねるとともに、各地域における小学校教育の改善充実に尽力されていることに敬意を表する。

近年の社会の変化は我々の予想を超えており、これからの地域を支える人材の育成を担う教育の役割が益々重要になっている。そのため、各学校では、これまでの教育実践を引き継ぎつつ、教育活動の一層の充実が求められている。

昨年３月告示の学習指導要領では、各学校において、どのような資質・能力を身に付けさせるかを教育課程に明確に位置付け、社会と連携・協働してその実現を図る「社会に開かれた教育課程」の推進が求められている。また、教育活動の質を高めるカリキュラム・マネジメントの確立に努めることも示された。具現化に向けて、学校の組織としての実行力の向上が必要である。

校長は、ビジョンを示し、到達までの組織を整備し、具体的な方策を立案するなど、組織としての方向性を明確にすることが必須である。更に到達に向けてぶれることなくやりぬく気概とねばり強さも必要である。

本大会が、研究主題のもと、全国の校長先生方が協議を深めることは意義深く、積極的な実践交流を通して多くの成果が得られることを期待する。

函館市長祝辞（要旨）

函館市長　工藤壽樹様

全国連合小学校長会北海道大会が盛大に開催

されることをお慶び申し上げる。北海道胆振東部地震や全国的に相次いだ災害で被災された皆様には心からお見舞い申し上げる。

函館市では人口減少や少子高齢化が全国を上回るペースで進んでおり、社会の在り方を総合的に検討していくことが必要である。人口減少時代にあっても一人一人がより豊かで幸せな社会を実現していくためには、個々人の資質を向上させる教育の力が極めて重要である。また、社会や町が持続的に発展し次の世代にしっかりと引き継がれていくためには、教育を通して現状を認識しつつ、この国や町の未来のために積極的に行動する人材を育成することが大切である。特に小学校の６年間は、多くの活動や体験を通して人格を形成する時期であり、社会を支える人材を育成する上で大きな役割を果たしている。本大会の開催を契機に、ふるさとを見つめ世界を見ながら、希望に満ちた未来の形成に向けて視野を広くして果敢に挑戦する気概をもった子どもたちを育てる学校経営が推進されることを期待する。

本大会の成功と全国・全道の小学校長会の益々の発展とご出席の皆様の活躍を心から祈念し、歓迎の挨拶とする。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省初等中等教育局教育課程課長　望月禎様

１　第３期教育振興基本計画について

注目点は「2030年以降の社会を展望した教育政策の重点事項」である。予想もつかない時代の社会をつくっていく子どもたちに対する教育には、未来をつくるという役割もある。引き続き「自立」「協働」「創造」の方向性が重要である。

「超スマート社会（Society5.0）」の実現に向けた技術革新が進展するなか「人生100年時代」を豊かに生きていくためには、「人づくり革命」「生産性革命」の一環として、若年期の教育、生涯にわたる学習や能力向上が必要となる。「夢と志を持ち、可能性に挑戦するために必要となる力を育成する」ためには、新学習指導要領の着実な実施等が必要である。

２　Society5.0における学びの在り方について

「Society5.0における学びの在り方、求められる人材像」における「共通して求められる力」「新たな社会を牽引する人材」は学習指導要領が目指すことそのものであるが、ＡＩ等の先端技術は、学びの在り方を変革する。キャッチフレーズは「学校が変わる。学習が変わる」である。例えば、個々の能力や資質を伸ばし、職業と結び付く教育を考える必要がある中、スタディ・ログ（学習履歴）を活用し、一人一人の能力や適性、希望を踏まえ、学習を「個別最適化」する方向性に社会は変わっていく。

そのために、小・中学校では「基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての児童生徒が習得」しなくてはならない。つまり、「新学習指導要領の確実な習得」である。特に小学校では基盤的な力を培っていただきたい。

３　新たな学習指導要領の円滑な実施に向けて

今回の学習指導要領での３つのポイントとして、「社会に開かれた教育課程の実現」については、学習指導要領の構造化された内容を、子どもたちや保護者には学習の過程を通じて、地域社会には連携の中で、分かってもらう。「主体的・対話的で深い学び」については、子どもたちが考える力をどのような方法で身に付けていくかについて一層の授業改善を促す。「カリキュラム・マネジメント」については、新学習指導要領を実のあるものにするために、校長先生がリーダーシップをとり、学校全体として進めることが重要である。

第５・６学年の外国語科では、これまでの外国語活動の蓄積を生かし、「聞く・話す」をベースとしながら「文法、書く・読む」の学習を行い、総合的な力を高め、中学校に接続させていただきたい。

プログラミング教育については、今回、高等学校や中学校でより重視したという一連の流れから小学校での推進を位置付けた。先行実施校の取組を参考にし徐々に教育計画の中に位置付けていただきたい。

総合的な学習の時間については、体験活動をさらに充実させていただきたい。地域と連携した夏休みや土日での活動を一定時間数位置付けることについて、現在、中央教育審議会で議論している。

４　学校における働き方改革の推進について

中教審の中間まとめ、それを受けた緊急提言、文部科学省通知を発出した。例えば、基本的には学校以外が担うべき業務、学校の業務だが必ずしも教師が担う必要のない業務、教師の業務だが負担軽減が可能な業務という各区分で、外部人材の活用や条件整備などを考えている。勤務時間の弾力化やガイドラインの作成も含め検討している。できる限り実情に即した形の提言としたい。

日本の教育は先生方の努力によって高められてきた。30・40代の先生方にこれまでの蓄積を確実に伝え育てることが大事である。「不易と流行」、そして変わらないものも進化させ、今までの蓄積の上に新しいものを取り入れ、教育の充実を目指す。未来を担う子どもたちを力強く育ててほしい。

第１日　全　体　会

司　会　　紺野元樹 大会実行副委員長

1　日程説明

2　運営委員会構成

3　本部報告

4　大会主題・研究課題趣旨説明

5　大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

喜名朝博　対策部長

５月22日に第229回理事会を行い、副会長・常任理事及び監事の補充及び第70回総会議案について了承された。５月23日の第70回総会・研修会では、文部科学省初等中等教育局主任視学官の清原洋一様をはじめ来賓より祝辞をいただき、５つの議案が承認された。午後の研修では、文部科学省大臣官房審議官白間竜一郎様の講演、文部科学省各課による行政説明が行われた。

７月９日、正副会長・常任理事が、文部科学省・財務省・総務省を訪れ、各大臣・副大臣・政務官・省内各課長に対し、小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書を提出した。

７月10日、小学校長会長連絡協議会では、学校における働き方改革について、文部科学省初等中等教育局企画官常盤木祐一様により検討状況の説明を受け、各都道府県における進捗状況の情報交換を行った。

８月31日、岩手県釜石市を中心に被災地視察を行った。懇談会では岩手県・福島県・宮城県・仙台市による現状説明があり、全連小としても復興加配の継続等を今後も強く要望していく。

昨日10月３日には第230回理事会を行った。今後の予定として、三地区対策・調研担当者連絡協議会は、東京で10月16日、大阪で23日、福岡で24日に開催する。

大会主題・研究課題趣旨説明

川島政吉　北海道大会研究部長

研究主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」と設定して６年目の現在まで研究を進めてきた。来るべき新しい社会において、子どもが心豊かにたくましく生きていくためには、社会の中で生活し社会をつくっていく力、直面する諸課題を乗り越え、自立した一人の人間として力強く生き抜いていく力を育てることが必要である。そのためには、人と人との絆をつくり支え合う共生への思いや、夢と希望に満ちた活気あふれるふるさとづくりに積極的に貢献しようとする意欲など、社会の形成者としての意識を醸成することが必要となる。

また、環境・資源・エネルギーなどの多様な課題に対し、グローバルな視点をもち様々な人々との協力で解決していく力、環境・経済・少子高齢化・地域格差などの直面する課題や震災からの復興などに粘り強く取り組み、持続可能で一人一人の個性と人間的な絆を大切にする社会を実現するたくましさを育むことが大切となる。さらなる知識基盤社会や情報化・グローバル化が進む中、ふるさとの文化を理解し尊重する態度の育成は、国際社会においても異文化を理解し尊重しようとする豊かな人間性を育むことにつながる。

つまり、この研究主題の趣旨は、人と人との絆をつくり支え合う共生への思い、夢や希望に満ちたふるさとづくりに積極的に貢献しようとする意欲を醸成するとともに、自立した個人が個性や能力を生かし、相手の価値観を尊重して、多様な人々との協働を通じ、新たな価値を創造し、柔軟な社会を実現できる人材を育成することを目指すものである。

本大会では、これまでの研究の成果と課題を受け継ぎ、大会主題のさらなる追求を目指すため、副主題を「ふるさとの地から世界を見つめ新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」と設定し、校長の役割と指導性を究明していく。

そして、「分科会の充実こそが最大のおもてなし」の精神のもと、参画型の分科会となるよう効果的な視覚化を取り入れ、提言を基に話し合い、参会者が方策を検討したり課題を明確にしたりするなどの運営を工夫し発信性のある討議内容を目指す。

＜分科会の研究課題及び研究の視点＞

Ⅰ　学校経営

第１分科会「経営ビジョン」

研究課題：創意と活力に満ちた学校経営ビジョンと校長の在り方
視点１：将来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定
視点２：学校の役割を明確にした創造的な学校経営の推進

第２分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの実現と活力ある組織づくりにおける校長の在り方
視点１：学校経営ビジョンの実現に向けた運営組織の構築
視点２：活力ある運営を実現するための組織の活性化

第３分科会「評価・改善」

研究課題：学校教育の充実を図るための評価・改善と校長の在り方
視点１：学校経営の改善に向けた学校評価の充実
視点２：教職員の資質・能力の向上に向けた人事評価の工夫

Ⅱ　教育課程

第４分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方
視点１：しなやかな知性と豊かな創造性の育成
視点２：しなやかな知性と豊かな創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善

第５分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方
視点１：よりよい社会を創る人権教育の推進
視点２：豊かな心を育む道徳教育の推進

第６分科会「健やかな体」

研究課題：健やかな体を育むカリキュラム・マネジメントと校長の在り方
視点１：生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する教育活動の推進
視点２：生涯を通じて自他の健康課題に適切に対応する教育活動の推進

Ⅲ　指導・育成

第７分科会「研究・研修」

研究課題：学校の教育力を向上させる研究・研修の推進における校長の在り方
視点１：教職員としての資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実
視点２：キャリアステージを意識した展望や、学校経営への参画意識をもたせる研修の推進

第８分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校運営を担うリーダーの育成と校長の在り方
視点１：学校教育への確かな展望をもち、実践力と応用力を兼ね備えたミドルリーダーの育成
視点２：時代の潮流を見つめ、豊かな人間性を身に付けた管理職人材の育成

Ⅳ　危機管理

第９分科会「学校安全」

研究課題：命を守る防災教育・安全教育の推進と校長の在り方
視点１：自ら判断・行動できる子どもを育てる防災教育・安全教育の推進
視点２：家庭・地域等との連携を図った組織的かつ計画的な防災教育・安全教育の推進

第10分科会「危機対応」

研究課題：様々な危機への対応と未然防止の体制づくりにおける校長の在り方
視点１：いじめ・不登校等への適切な対応と体制づくり
視点２：高い危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体制づくり

Ⅴ　教育課題

第11分科会「社会形成能力」

研究課題：社会形成能力を育む教育活動の推進と校長の在り方
視点１：社会の発展に貢献する資質・能力・態度を育む教育活動の推進
視点２：身の回りの仕事や環境に関心をもち、目標に向かって努力する態度を育成するキャリア教育の推進

第12分科会「自立と共生」

研究課題：自立や共生の実現に向けた特別支援教育と環境教育の推進における校長の在り方
視点１：子どもの自立を図る特別支援教育の推進
視点２：持続可能な社会の担い手を育み、教科・領域との関連を図った環境教育の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域等との連携と異校種間接続の推進における校長の在り方
視点１：家庭・地域等と連携し、特色ある教育活動を展開する学校づくりの推進
視点２：成長の連続性を生かした異校種間接続の推進

第2日　全　体　会

1　研究協議のまとめ
2　大会宣言
片桐由博 大会宣言文起草委員長

研究協議のまとめ

川島政吉　北海道大会研究部長

昨日は13の分科会において大変熱心な協議が行われたことに心から感謝申し上げる。

各分科会においては、21世紀を生きる子どもたちに求められる資質・能力の育成に向けた教育課程の編成・実施・評価・改善や今日的教育課題の解決に向けた指導体制の確立のための校長の役割の具体的方策等について重点的に研究協議が行われた。それぞれの分科会における提言や協議、まとめなどを俯瞰し、校長の果たすべき役割と指導性について２つの観点で整理する。

1　分科会協議について

⑴　子どもの実態や地域の特性を生かしたカリキュラム・マネジメントについて

【知性・創造性】　教職員の意識改革に向けたリーダーシップ、ビジョンの明確化と共有、協働的な取組の推進が話題にあがった。教職員の意識改革と教職員全員によるカリキュラム・マネジメントの推進、「見える化」によるビジョンの共有の大切さが確認された。

【豊かな人間性】　異校種間の指導をつなげ、道徳から他教科、日常生活へ学びをつなげるコーディネート、人権教育・道徳教育のフィルターを通して教育活動を再生することが話題に出た。経営ビジョンの明確化と校内外への浸透、評価・改善の充実と進行管理の重要性が確かめられた。

【社会形成能力】　学校と地域をつなぐ役割、教職員や家庭・地域をつなぐ組織・体制づくり、人材の発掘・育成、歴史をつなぐ仕事が話題になった。社会形成能力を育成するために「なりたい自分」、社会に開かれた教育課程が重要であることが確かめられた。

⑵　学校の組織力向上及び人材育成について

【経営ビジョン】　明確なビジョンの提示・共有、人材育成、中でも若年層からの育成、参画意識などがキーワードとしてあがった。策定したビジョンの具現化のためには、校長の覚悟を示すこと、ボトムアップとトップダウンのバランスの大切さが確認された。

【組織・運営】　学校経営ビジョンの実現や組織の活性化のために全教職員が自分ごととして共通理解を図ったり、学校・教職員・子ども・地域の状況を適切に見極めたりすることの大切さが確認された。

【評価・改善】　経営方針を実現するための組織の在り方、人材育成につながる人事評価、経営ビジョンの適切な明示と情報公開の重要性、教職員自身が自己の資質・能力の向上を実感できる評価の工夫などについて確認された。

【研究・研修】　校長の直接指導の是非、働き方改革のバランス、教員育成資料の活用、若手育成などのキーワードが出された。学ぶ仕組みと文化をつくるのは校長であること、よい学級経営や授業のためには目指す子ども像や目標の明確化が必要であることが、確かめられた。

2　全分科会を通して

校長の役割と指導性について次の２点が大切であることが見えてきた。

１点目は、校長が明確な経営ビジョンを示すことである。子ども・家庭・地域の実態を的確に調査・分析・考察し、地域に密着した学校経営ビジョンを創造することで学校内外に発信・浸透させ、共有化していくことが家庭・地域社会との協働・連携につながっていく。

２点目は、学校のチーム力向上である。そのためには全教職員が情報と目標を共有し、学校課題の解決に向けて、一人一人のアイデアを生かしながら、創意工夫のある教育活動を協働体制で展開し、成果と改善点を検証していかなければならない。校長にはチームをまとめていくリーダーシップや組織マネジメントが求められる。学校経営ビジョンの実現が目の前の子どもたちのためになるという実感を教職員にもたせ、協働意欲と協働関係をつなげて、目標を達成するようにしていく。このような校長のリーダーシップを常に意識できるよう研鑽を積み重ねていきたい。

3　まとめ

各分科会とも円滑に運営され充実した内容になったのは、事前にホームページで確認したり資料を持ち寄ったりするなど、参加した会員の高い参画意識のおかげによる。本大会の研究の成果が、参会者を通して函館の地から全国へ広がり、今後の学校経営に生かされ、新たな知を拓き人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進につながることを確信する。そして来年度開催される秋田大会に引き継がれ、さらなる大きな成果を得られることを願い、研究協議のまとめとする。

大　会　宣　言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果を上げてきた。

本大会では、第65回三重大会から６年目となる大会主題「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の実現を目指し、これまでの五大会の研究成果と課題を引き継ぎ、組織をあげて鋭意努力して取り組んできた。

現代は、知識基盤社会への新たな進展やグローバル化の進行、世界に類を見ないスピードで進む少子高齢化により、先を見通すことが困難な時代を迎えている。このような中、我が国では、今後の社会の方向性として「自立」「協働」「創造」の三つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが求められている。一方、2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックに向けて、各分野で様々な取組が行われている。教育においては、新しい時代に求められる資質・能力を育成する新学習指導要領の着実な実施に向けて、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善や各学校におけるカリキュラム・マネジメントの確立等についての必要性が示されている。

こうした国の動向を注視しつつ、東日本大震災をはじめとする被災各地域における教訓と取組を共有し、社会において自立的に生き抜くため必要な「生きる力」をバランスよく確実に育むことが学校教育の責務である。併せて、時代の潮流や近未来的な課題を踏まえ、社会の変化に主体的に関わり、問題解決を図る創造的な思考力やしなやかな知性といった、新たな知を生み出す力を身に付けることも求められている。そのため、小学校教育においては、学校と地域が両輪となり、教育課程を介して、多様な他者と協働できる共生の意識やふるさとをはじめとするこれからの世界を担う未来の創り手としての素地を育成することが重要である。

私たち校長は、北海道大会における副主題「ふるさとの地から世界を見つめ　新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進」を基盤に据え、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第70回全国連合小学校長会研究協議会の総意に基づき、次の決意を表明しその実現を期する。

記

一、新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く　日本人の育成を目指す小学校教育の推進
一、ふるさとの地から世界を見つめ　新しい社会の形成に向けて挑戦する子どもを育てる学校経営の推進
一、「生きる力」の育成を目指した創意工夫ある教育課程の編成・実施・評価・改善
一、道徳教育を中核とし、命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
一、主体的に判断・行動し命を守る子どもを育成する防災教育の推進
一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携・協働による教育活動の充実
一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
一、校長自らの研鑽と、教職員の資質・能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成30年10月５日

第70回全国連合小学校長会研究協議会北海道大会

シンポジウム（要旨）
「ふるさと・挑戦・未来創造」

シンポジスト

スキージャンパー　葛西紀明氏
ＨＴＢ（北海道テレビ放送）編集局編成部　佐藤麻美氏
北海道ＰＴＡ連合会顧問　青田　基氏

コーディネーター

全連小調査研究部長　針谷玲子

針谷　このシンポジウムでは、未来を創る子どもたちに、「ふるさと」「挑戦」「未来創造」という視点からメッセージを語っていただく。

まず、今の自分を形成している基盤について、「ふるさと」という視点から自己紹介も含めてお話しいただく。

佐藤　ふるさとに対するいちばん深い思いは「食」である。母は「食」にこだわりがあり、母親の手伝いをするのも地元の食材での料理も当たり前であった。

佐藤氏

「食」への貪欲さや興味深さは幼少期の経験が大きい。

また、小・中・高の先生たちとの出会いで得たものが自分の性格の基盤になっている。小学校６年生のとき、先生の支えがあり児童会長を務めた。「食」との出会い、先生との出会いという二つの経験が思い出深く、それが今の子育てにも大きく影響している。

まず、私の子育てのモットーのひとつに「好奇心の芽をつまない」がある。小学校４年生のときのアナウンサーになりたいという好奇心で夢を叶えた。 次が「食の楽しさを知ってほしい」ということ。「食」との関わりを大切にしていくことが子どもたちのベースになると思い、「食」にまつわるいろいろなシャワーを子どもたちに浴びせている。「食のシャワー」とは、食材について①見る②触る③買う、料理について④考える⑤作る⑥食べる、である。

青田　函館に生まれ育ち、現在は函館で教育支援・学習支援の仕事をし、子どもたちの健やかな成長に関わることに携わりながら函館で頑張っている。

「ふるさと」について３つのことに思いをはせた。

①私が生まれる前。北海道に先祖が渡ってきて開拓をし、命のバトンをつないで私がいる。つないでくれた祖先の歴史や足跡が一つ目のふるさとと思う。

②函館で過ごした18歳までのいわゆる少年期のことがふるさとのひとつと思う。当時は大家族だったのでいい意味で放任だった。誰も世話をしてくれないから自分でやるという形の少年期を過ごしていた。

③家の商売を継ぎに函館に戻り、結婚して５人の子どもが生まれた。今では珍しい大家族。北海道一円満家族、日本一円満夫婦だと思っている。自分にとっては家族がふるさとである。

葛西　私は上川郡下川町で生まれた。今46歳、まだ現役で頑張っている。

小さい頃私は身体が弱く、父親にマラソンをやらされた。体もどんどん強くなり、小学校３年生の時にスキージャンプに巡り合った。始めは怖かったが好奇心の方が強く、だんだん飛距離が伸び、のめりこんだ。ジャンプをやりたいと親に相談したが、道具が30万円ぐらいかかるのであきらめた。すると、ジャンプ少年団のコーチが説得に来て、２歳上の岡部孝信選手のお下がりをいただけることになった。

自分の運動神経のよさを気付かせてくれたのは学校の先生だった。何かひとつ好きなスポーツを見つけて極めた方がよいとアドバイスをくれた。親や先生に感謝している。どんなことにも自分で努力していくことや、支えてくれたことに感謝することが大切なのだと思う。

針谷　次に「挑戦」について、大きな変化や苦しかったことをどのように乗り越えられたのか、どのように挑戦したのか、その経験から学んだことや子どもたちに伝えたいことなどをお話しいただきたい。

青田　就職して３年後、函館に戻って父の仕事の石油事業を継いだ。父が引退して36歳で経営者となったが２年後に父が他界した。今から15年前、教育事業を始め、３年前に石油事業を売却し、教育事業に専念した。同時期にまちづくりにも参画したが、ある方に一体何がやりたいのかと言われ、教育一つに絞った。

青田氏

17、18年前にＰＴＡ会長を引き受けた。ＰＴＡ活動は、「おかげ様、お互い様、ほっとけない」の地域の子育てと学校教育とを地域や保護者がどう支えていくべきかがテーマである。「ＰＴＡは学校と校長先生の最大の応援団になろう」と全道に呼び掛け、学校と地域と家庭が連携・協働して子どもたちのことを考えられればと挑戦している。

これまでの経験から得た教訓は、①苦しくても真摯に生きていれば命までは取られないし、助けてくれる人も現れる。②社会の中の問題課題に気付いてしまった人には責任が生まれる。③ほうっておけない課題は誰かが旗を揚げるか動き始めないと解決できない。

佐藤　大きな挑戦はアナウンサーになりたいという夢を叶えることだった。中学・高校と放送部に入った。高校３年生のＮＨＫ杯で全道大会に出場したが、のどを痛め僅差で全国大会に出場できなかった。人生初めての挫折を味わうが、「絶対アナウンサーになる」と強い気持ちになった。大学でも放送部に入り活動した。

就職活動で全国の放送局を受け、２年目に初めて合格したのが北海道のＨＴＢだった。帰って来たかったわけではないが、これも縁だと思う。

夢を叶えるためには、絶対にあきらめないこ

と、最大限の努力をすること、仲間を大切にすることが大切。

自分の育った場所に恩返しする仕事ができるので、今は地元の放送局に就職してよかったと感じている。

葛西　中学校３年生のときにテストジャンパーとして、優勝した選手よりも飛んで、新聞に大きく載ったことから注目を浴び、世界を目指して挑戦する気持ちになった。

葛西氏

高１で初めて世界大会に行ったが、世界のレベルの高さに打ちのめされた。努力をし、高２でワールドカップ７位入賞３回。高３でスランプが１年続いたが、母親からの手紙で迷いや焦りが消えた。

1992年、アルベールビル五輪に出場。Ｖ字スタイルへの転向に挑戦したが緊張でうまく出来ずに終わった。1994年のリレハンメル五輪では、難病と闘う妹のために金メダルを獲りたかったが団体戦で銀メダルだった。家族の死を乗り越えて絶対金メダルを獲ると思っていたが1998年長野五輪には出場できなかった。その時の悔しさとライバルの存在でジャンプを続けることができた。長野五輪後はルール変更が毎年行われ、ルールに対応できない状態が10年以上続いた。

2014年のソチ五輪で２つのメダルを獲ることができ、皆さんに夢や希望や感動を感じてもらえたと思う。今年、ピョンチャン五輪ではメダルを獲ることはできなかった。この年になると不安が募るが、挑戦する気力が自分でもすごいと思う。次の北京五輪にも挑戦したい。子どもたちにもどんなこともあきらめずに挑戦してほしい。先生方には子どもたちに好きなことをやらせる道をつくってあげてほしい。

針谷　これからの教育に期待することについて「未来創造」という視点からご自身の体験を踏まえてお話しいただきたい。

佐藤　東日本大震災の１年後、「今、私たちにできること」というプロジェクトを立ち上げた。北海道のメッセージを東北に届けている。今回、北海道胆振東部地震もあり、子どもたちには防災減災も伝える必要がある。メディアはそういう役割をもつと思う。

また、視聴者とのふれあいで自分の生きる枠の広がりを感じた。生きにくい世の中だからこそ子どもたちには多くの人と出会い、人と人とのコミュニケーションを大事にしてほしい。

仕事でも育児でも大事にしている言葉が３つある。それは①好奇心②想像力・創造力③向上心である。

子どもたちがこれからの未来を創っていく大きな素敵な人間になれるように、また、明るい未来があるように先生たちからアドバイスと応援をしてほしい。

葛西　中学生の頃から海外遠征をし、高校生以降はワールドカップや合宿で海外を回っていた。身振り手振りで外国人選手と仲良くなったが、若いうちに新しいものや言葉をしっかり学んでおけばよかったと後悔している。子どもたちにコミュニケーションのとり方なども教えてほしい。

最後に、私の座右の銘は「自分の夢は努力で叶える」である。人に言われて努力するのはつらいことだと思う。まず、自分の夢をもって、それを叶えるために努力を続けてほしい。「未来創造」に大切なのは夢をもつこと。先生方も未来のある子どもに道をつくってあげてほしい。

青田　学習支援のほかにいろいろな仕事をしているが、一番力を入れているのはキャリア教育で、子どもたちに話をするときによく使う、パソコンの父と呼ばれるアラン・ケイという方の言葉を紹介する。

「未来を予測する最善の方法は自らそれを発明（創造）することだ。未来はただそこにあるのではない。未来は我々が決めるものであり、宇宙の既知の法則に違反しない範囲で望んだ方向に向かわせることが出来る」これを聞き、自分が働けば未来をよりよい方向に変えることができるのかもしれないと勇気をもらった。

キャリア教育は、自分の生き方をデザインする「生き方のデザイン教室」である。自分で選択する力は社会に出て役に立つ。組織の中で他者の価値観を受け止めつつも自分の価値観とどう折り合いをつけるか、人生をどう生きたいのか、そしてそのためにどんな仕事に就きたいのかと子どもたちに質問を投げかけ続けている。そのような形で自立心と社会性を育んでいる。

子どもたちがどんな世界に生きるのか想像を巡らせ、「君たちはこんな世界に生きるかもしれないから、今頑張ろう」という雰囲気を学校の中につくってほしい。

ＰＴＡや地域も関わって、学校の先生たちとともに子どもたちのためにできることをやっていただきたい。函館を「子育て・教育したいまち」で日本一にし、それを競い合う世の中、日本にしていきたいと考えている。

閉　会　式

1	あいさつ	種村明頼 大会会長
		本間達志 大会実行委員長
		佐々木哲 次期開催地代表
2	閉会のことば	井上淳司 大会副会長

第230回　理　　事　　会

10月3日（水）午後1時45分開会　　函館アリーナ 武道館ＡＢ

進行　升屋 庶務部長

1　開会のことば　　中村 副会長

2　会長あいさつ（要旨）　　種村 会長

9月に入り台風21号、そして北海道胆振東部地震により多くの被害が発生した。謹んで亡くなられた方々とご遺族に哀悼の意を表すとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げる。

7月の会長会において、西日本豪雨により被害が大きかった当該県にお見舞金をおくった旨を報告したが、北海道胆振東部地震の被害が大きいことから9月の常任理事会で検討し、お見舞金をおくった。

⑴文部科学省次年度概算要求について

8月30日文部科学省は次年度5.9兆円の概算要求をまとめた。夏の猛暑対策のための空調設置、学校のブロック塀倒壊対策のための耐震化等学校の安全・防災を盛り込んだ予算編成となっており、11.8％の増加である。そのうち初等中等教育局が要求・要望した額は、昨年度と同様の約1.5兆円である。小学校専科指導の充実で1,000人が計上された。また、スクール・サポート・スタッフの配置が拡充されている。しかし、国の補助率1/3、各自治体が2/3負担という事業である。他のスタッフ等の人材配置についても補助率や補助年数等の問題があり、各教育委員会と連携を図り対応していく必要がある。新規事業として、福祉、地域との連携、Society 5.0への対応への研究、開発、委託等の予算が計上されている。

⑵学校における働き方改革について

「文部科学省は、公立学校に勤務する教職員の労働時間を年単位で管理する変形労働時間制を導入する方針を固めた」「職員の時間外勤務の上限目安を月45時間とするガイドラインの案を大筋で承認した」等の新聞報道があった。文部科学省の担当者に確認したところ、部会内で提案されただけであり、決定したものではないそうだ。今後も給特法も含め議論されていくとのことである。

⑶教育課程関係について

6月に「経済財政運営と改革の基本方針2018」が閣議決定され、「小学校における教育課程の弾力的運用についての検討を進める」との内容が示された。これに基づき10月1日の中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「総合的な学習の時間における家庭・地域等と連携した学校外学習の位置付けの明確化について」が示された。この案では、教師が直接的に指導をしなくても、時間や期間等に関わらず、児童生徒が主体的に探求する活動において、目標や内容等の一定の条件を満たせば授業として位置付けられる（授業時間の1/4程度）というものだ。同部会の学習評価に関するワーキンググループでは、「指導要録の改善」と「観点別学習状況の評価」が大きな論点となっている。指導要録については、簡素化の方向で協議が進んでいるが、充実しなければならない点もあり、今後も協議を深めていく。観点別学習状況の評価については、平成28年度の答申において「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理された。「主体的に学習に取り組む態度」については他の2観点と同様の評価でよいのか、具体的にどのように評価すればよいのかなどが協議されている。そのまとめの公表は今年度末になるとのことである。

3　報告　　司会　井上 副会長

⑴　会務・事業・活動の大要　　升屋 庶務部長

⑵　会計　　山田 会計部長

・基金管理状況　・負担金納入状況

⑶　研究大会について

・北海道大会について　　本間 北海道会長

・秋田大会について　　佐々木 秋田県会長

開催日：平成31年10月17日（木）・18日（金）

⑷　要望活動について　　喜名 対策部長

7月9日に、「平成31年度小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する要望書」を文部科学省、財務省、総務省へ提出した。そのうち特に①教職調整額の引き上げ②震災復興に関わる加配の継続③義務教育標準法の改正に伴う教職員基礎定数の抜本的な見直し並びに持ち時数の観点に立った加配配置、専科教員のさらなる導入について、強く要望した。

⑸　東日本大震災について（被災地視察、被災県より）

①被災地視察及び懇談会報告　喜名 対策部長

8月31日に、種村会長外3名と岩手県、宮城県、福島県校長会の数名が岩手県釜石市立鵜住居（うのすまい）小学校を視察した。震災で校舎が全壊したが、高台の新校舎で授業が再開されている。跡地は、復興スタジアム（ラグビーワールドカップ会場）に整備された。

懇談会では、まだまだ復興が進んでいないこと、子どもたちの数の減少、被災体験がない子どもたちの心の問題が増えているなどが共通の報告としてあった。

②岩手県より報告　　外山 岩手県会長
震災により損壊・流出した23の校舎が、来年度までに全て新築される。また、仮設住宅が建てられていた32校の校庭で、８月までに最後の撤去作業が完了した。校庭の整地作業等が行われていない所もある。工事の関係で、通学路を毎週のように変更せざるを得ない学校もあり、安全確保が課題である。子どもたちは比較的明るく生活しているが、防災訓練のサイレンに極度におびえたり、登校を渋ったりと精神的に不安定な行動をとる者もいる。ハード面での復興は少しずつ進んでいるが、子どもたちの心の支援は十分でないので、県校長会としても支援の手を差し伸べ続けていく必要があると、とらえている。

⑹　その他

著作物の教育利用に関する関係者フォーラム委員の推薦について　　針谷 調査研究部長
対策・調査研究・広報・庶務の４部長が対応

４　情報交換　　司会　喜名 対策部長

「各都道府県における人材育成上の課題」
①人事評価について
②若手教職員の育成（採用・育成指標等）

北海道　①平成28年度から「能力評価」と「業績評価」の２本柱で実施し、評価結果は、校長以外原則口頭で開示する。面談、所見記入の時間負担が課題である。②若手教員が増加しているが、志願者は減少傾向にある。今後、教員育成指標を活用し、教員養成と現職教員との接続を図る。また遠隔システムや出向いての研修など工夫して人材育成を行っていく。

秋田　①人事評価の結果は給与に反映していない。評価を活用して教員を育てるためには結果の開示が必要である。「職務行動記録票」を活用し、客観的事実に基づく厳正な評価をしなければならない。②平成30年３月に「秋田県教員育成指標」を策定し、各教員の資質・能力の道標とした。現在、キャリアステージに応じた「あきたキャリアアップシート」を作成中である。

千葉　①「目標申告シート」と「職務能力発揮シート」の２本立てで人事評価を行っている。評価結果については給与等に反映するが、「特に優秀」「優秀」等の評価区分の上限のみが、各学校で設定されているだけである。②千葉県・千葉市教育委員会では、平成30年３月に、自ら学び続ける信頼される質の高い教員等の育成を目指して「千葉県・千葉市教員等育成指標」を策定した。「教職に必要な要素」「学習指導に関する実践的指導力」「生徒指導等に関する実践的指導力」「チーム学校を支える資質・能力」の４つの柱と「養成」「採用」「研修」の３段階で構成している。

静岡　①人事評価は「人事評価シート」と「自己目標シート」で構成し、結果は12月の勤勉手当に反映される。各学校での上限の割合が決まっていることが課題である。②「静岡県教員養成指標」を策定するとともに、若手教職員の育成には、「ステージごとの研修」「臨時的任用教職員研修（年３回）」「教職員サポートルーム事業」等を通じて実施している。

兵庫（神戸市）　①平成29年度の権限移譲により平成30年度から、神戸市による人事評価制度の本格実施となった。評価結果は、平成31年度から、夏期・年末の手当に反映される。「面談時間の確保」「報酬に反映されるだけのエビデンスを示すことが困難である」等が課題としてあげられる。②若手教員育成に関しては、「教員等育成指標」を策定し、それに応じて指導・育成を行っている。

島根　①自己目標の設定及び自己評価、管理職による面接及び校内組織による相互支援を使った「資質能力向上支援システム」を運用し人事評価を行っている。人事評価による給与への処遇反映はされていない。②「島根県公立学校教員人材育成基本方針」を平成30年２月に策定し、教員のキャリアステージに応じて、指導・育成を行っている。

愛媛　①平成28年度から目標管理制度の運用が始まった。当該年度を上半期、下半期とし、組織目標の提示、期首面談、指導、自己評価、評価及び面談のサイクルで目標管理を行っている。②採用が厳しかった時代の教員と比べ、採用後に今まで以上の研修が必要な者が増加している。キャリアステージを整理し、「愛媛の教員に求められる資質・能力」を明確にしたうえで研修を通じて、育成・指導を行っている。

鹿児島　①平成28年３月に人事評価実施要領の一部を改正し「能力評価」「業績評価」のそれぞれに、実施方法、評価基準、評価票等を定めた。②平成29年12月に「かごしま教員育成指標」を策定した。キャリアステージに関係なく、「人間性・社会性」「職責感・使命感」「探求心・自己研鑽」「教育に対する情熱」の４つを「素養」の項目に位置付けている。

５　連絡・その他

⑴　広報部より　　戸倉 広報部長
・全連小刊行物等の活用について
「速報（電子版）」「小学校時報」「教育研究シリーズ」「特色ある研究校便覧」及びホームページの活用をお願いいる。

⑵　事務局より　　内藤 事務局長
・平成31年度海外教育事情視察（隔年実施）について
平成31年度は、７月27日～８月２日に実施予定

６　閉会のことば　　中村 副会長